

## 團平節付の苦心と「彦六」の由來

こゝ百二三十年の人形淨るり史の素材を、その道の太夫、三味線、古老によつてその記憶を今のうちに喚起して、書き付けておかうといふ私の企てた記録から、近世の三味線の名人二代豊澤團平を、こゝに申述べる事とする。

二代の豊澤團平といふ人は、播州加古川の産で、大阪へ來て竹本千賀太夫といふ序の切を語つてゐた位の身分の太夫の養子となつたが、團平の咽喉はとても太夫の器ではなかつたらしい。養父の千賀太夫は、太夫を斷念して、三代廣助の弟子にして三味線彈にさせようとした。それは十三歳の時であつた。團平の本名は加古仁兵衛。

太夫は失敗だつたが、一度び三味線を持つと團平の才分はメキ／＼と發達した。養ひ親の千賀太夫も自分の眼の高かつたことを誇つたのであるが、三代廣助は名人であつたから、團平はとも自分は廣助の名は汚せないといつて「廣助」は猿糸といつてゐた兄弟子に譲つて、自分は師匠三代目廣助の先代二代目廣助が若い時に名乗つたことのある「團平」を名乗つた。で、團平の藝名をいふと、力松、丑之助

團平といふ順序であるが、二代廣助が「團平」の間は人も知らぬ位の短い年月であるので、團平名はこの團平を初代としてゐますが、嚴密に言つて、二代目團平です。

團平の丑之助は、十七歳にして當時の大横綱であつた。若太夫を弾いてゐることを見ても若くして、その才分は認められてゐたことが分る。二十八歳にして中古の名人長門太夫——河堀口の太夫といつた長門太夫を弾いた。この時に傳ふべき一つの逸話がある。

長門太夫の合三味線は、鶴澤清七であつた。ある日、團平の丑之助が若太夫の三味線を舞臺で弾いてゐるのを聞いた清七が、「又ジャンジャラノ」と小やかましい三味線だ、丑だらう」といつたのだが、これを聞いた長門太夫、「お前はどう思ふか知らぬが、お前が死んだらわしの三味線を弾くものは、あの丑之助の外にはない。年こそ若いが名人長門の合三味線は丑之助のものだ。」といつた。清七は例の三絃節章むしやうの創始者である清七の名をついでゐるほどの名人、長門は中古の名人といはれた人だが、とにかくにも若い團平の丑之助の腕は、先輩の間に問題となつてゐたのだ。

この言が讖しんをなしたのでもあるまいが、その年に清七は死んだ。この清七は三代目清七で、それは安政三年九月二十三日のことであつた。斯くて長門太夫の三味線は團平が弾くことになつた。その後團平は五代目春太夫、又名人の湊太夫をも弾いてゐたが、春太夫を弾きながら、團平は明治の偉人、ある意

味からいつて、淨るりの節に一紀元を與へた攝津大掾の藝を養成したのであつた。

多少専門的のお話にはなるが、湊太夫と春太夫と團平とが、一日大議論があつて、その各自の見るところが、そのまゝに今日、その系統の人々に傳つてゐる節の話がある。これは春太夫系の淨るりと湊太夫同趣味の淨るりとの違つた一例にもなるから、文字では説明しがたいが述べておかう。

それは、——

淨るりには「スエテ」といふ一つの節がある。例へば、「寺子屋」の源藏が、小太郎を見るところの、きつと見るより暫くは、打まもりゐたりしが、「打ちまもりゐたりしが」が、それである。隨所にある「スエテ」の一例である。

春太夫はこの「スエテ」は、すぐに「一」へ落ちるのだといひ、湊太夫と團平とはこれに反對して「ギン」へ落ちねば「スエテ」にはならないといふのが、その各々の主張であつた。——鳥渡この相違を文字で現はすことはむづかしいのだが、元來春太夫といふ人は、名人で大きな淨るりであつたが、乙の聲の少い人であつたから、「スエテ」をすぐに「一」に落したのだが、スエテを「ギン」へ落すと、乙の聲が必要になつてくる。乙がうんと利かぬと、「ギン」に落ちない。この元來の太夫の聲が、その主張の生るゝ分岐點なのであるが、これは湊太夫團平の主張がほとんどであつたが、今日でも、春太夫系統の人々は

「ステテ」を「一」へおとして語つてゐるのを心づくたらう。

ところで、文樂座は當時松島の今の八千代座の所に興行してゐたが、地の利を失つてゐたので振はず御靈の土田の席を買ひとつて新築し、明治十七年九月に落成、松島から移轉したのであるが、これが大正十五年に焼失した文樂座である。

これに對立したのが「彦六座」で、明治十六年十月、十一月と二ヶ月間日本橋北詰澤の席で旗揚げ、博努町の稻荷にあつた芝居へは翌十七年正月から移轉し、六月芝居を打揚げると改築に着手して、文樂座と同じく十七年の九月に落成開場式を擧げた。

この彦六座に團平も入座したのである。鳥渡こゝで申述べたいことは、「彦六座」といふのは彦六座の創始者の柳適大夫が、「彦山権現」の六段目を得意として語つたから、直ちに以て「彦六座」と命名したのであるといふのが、世間に流布されてゐる俗説で、秋本清氏の著である「義太夫大鑑」などもさうした説を採用してゐるが、實はさうでない。

始め松葉屋廣助、即ち五代目廣助の素人弟子連中で、彦六社といふのがあつた。これは「彦」といふのは「貧乏」といふこの仲間の隠語である。貧乏が六人集つたといふので、「彦六社」と名づけた。且つ其の上に、モテないことが恰も明烏の「彦六」組やがな——といふのが本來で、廣助の素人弟子連中の

彦六社が生れた。この彦六社には、素淨るりの十八じゅうはちといふ好き者があつた。十八は「彦」ではなかつた相當の分限者であつたから、好きから十八が金主となつて座を作つて、芝居を興行することになつた。これが彦六座で、彦六社の同人である十八が創始したのだから、まづ座名を「彦六座」と稱した。

十八は難波なんばの酒屋で、屋號を灘屋なみやといひ、本名は寺井安四郎。ソコで「灘安なみや」で通つてゐた酒屋だつたが、後に本業の太夫になつた。これが二代目竹本柳適太夫である。

柳適の初代と二代とが、よく混淆されるから序でに記しておくが、初代柳適太夫は、灘五郷の酒屋で加納の別家にあたり、灘の柳店やなぎみせといつた酒屋の旦那であるが、淨るりのために身代を費ひ果たしたものだから、柳店の敵は淨るりだといふところから、「柳敵」——「柳適」となり柳適太夫と藝名をつけて、太夫の客分となつてゐたのだ。灘安の二代目の柳適は灘の人でなく、大阪に住つてゐた灘屋の主人である。これが往々混淆されて今に分らなくなるから、茲にハッキリと記しておく。

彦六座は、博勞町の稻荷の境内にあつた小屋で創められたのであるが、位置をハッキリと申述べておくと、博勞町の稻荷は久寶寺町の通りが芝居の横手になつてゐたので、即ち稻荷の北門から入つて東側に彦六座の繪看板が出てゐたといふ位置である。

彦六座の一座の旗揚當時の顔ぶれを見ると、殆んど凡てが文樂座に對する不平黨で固められてゐる。

即ち越路太夫と紋下を争つた盲目の住太夫、駒太夫、源太夫、朝太夫、春子太夫、それに座主の柳適太夫、三味線は團平、新左衛門、人形では才治などがある。

この彦六座の新築は、大阪の寄席や芝居小屋にとつては一大革命であつた。それまでは大抵ござを客席に敷いてゐたのが、淨るり小屋の有様であつたのを、彦六座で始めて疊を敷き、夏は籐むしろを敷いた。冬は毛氈を敷くといふ風に改良された。これは後のことだが、夏分に客席の中央に噴水を出したなどが市中の評判となつた。後にこの彦六座が文藝株式會社の經營となり、又座名も「いなり座」となり彌太夫、團平が紋下だつたが、それは後の話で、團平は文樂座を明治十七年に退いたが、彦六座では柳適太夫も弾いてゐた。大隅を弾くやうになつたのは、大隅がまだ春子太夫の時代に、大隅の春子は團平のために引立てられるつもりで、弾いて貰はうと懇願したが、團平は春子太夫の名では俺は弾けないといふので、春子太夫は當時継ぎ手のなかつた大隅太夫の名跡を襲うて團平を合三味線とする宿願を果たし、よく團平の指導を得てあの名聲を擧げたのである。これは明治十七年十一月の「國性爺」からだ。

團平は當時南區東清水町、今の北村牛肉店の斜向ひに住ひ、その一軒おいて西隣が四代土佐太夫で、又藍玉の組太夫も清水町に住つてゐたが、團平は後に師匠三代目廣助の墓が、下寺町四丁目の遊行寺にあるところから、名人土佐太夫の墓をも、小橋から遊行寺に引いて一建立で、建碑したのであるが、縁

は異なるもので、團平と土佐太夫とは近所づからの親しみがあつたが、土佐太夫の後は原田といふ醫師でその娘が米國まで流れ渡つてゐたのに、米國で邂逅りあつたのが團平の息加古平三郎氏で、平三郎氏は先年歿した弟の國吉とともに藥劑師を志して渡米してゐたのである。

元來團平といふ人は、藝以外には何も無い。稽古には寢食をほんとに忘れた人で、例へば夜芝居がすんで宅へ歸ると、一合ばかりの酒をチビリ／＼嘗めるやうに飲みながら、拂曉四時頃まで、弟子を近づけ藝談をやつてゐたといふのであるから、二時間ばかりしか寢なかつたのである。

藝熱心といへば一度もこんな話が傳はつてゐる。——團平の清水町の宅を一日訪づれた風采の卑しい五十位の男があつた。そのいふ處によると、この男は三十年から義太夫の門付を渡世にしてゐる冥利に一度は團平師匠のテンと一撥でいゝからさし向ひで聞きたい。床で聞くことは金づくの何でもないことだが、さし向ひで聞きたいといふ意志を傳へた。

藝人の家へこんな種類の訪問客は數知れないので、妻女のおちかさんは、主人は留守だといつて取上げなかつた。次の間でかくと聞いた團平は、いゝえ團平はをります留守でも何でもありません、折角私の藝を聞きたいといふ有難い、思召は反古にしたくないといふので、件の男を座敷にあげ親切に一時間ばかりも、三味線を教へて歸へした。そして嫌天下の加古家には珍しい、一目も二目もおいた團平が妻

女の心の据ゑ方の至らぬを叱つて、離縁するとまで怒つたといふことである。

又一年團平は、清水町の表を流して来る旨目の二十歳ばかりの女の破れ三味線に感じ入つて、毎日々々の門付の三味線を格子の間で聴いては、自分の藝の至らぬことを啣つたといふが、團平の曰くにはあの女の三味線は全く「自然の鍛錬」で、あれだけ弾いてゐるが、只の一つの仇撥もない。吾々は實に恥しいことだといひくしてゐた。團平が百年かゝつてもあの鍛錬はダメだ。あの女の三味線なぞ自然だといつて學ぶところを門弟どもに教へたとのことであるが、當時の伊達太夫、今の土佐太夫が、自分の當時の耳では、所謂「自然の鍛錬」がどこにあるのかハッキリと判らなかつたが、この頃やうく、當時の話を想起して團平の謂ふ「自然の鍛錬」が分りかけたやうな心持がすると語つた。

これも土佐太夫が、伊達太夫時代の話であるが、伊達太夫は人も知る如く「伊勢音頭」の十人斬では賣込んだ人だが、團平が伊達太夫の十人斬を聴いて、十人斬は近世では組太夫が飛切りうまかつたが、お前の聲は組太夫とは違ふから、伊達太夫の節を俺が別に拵へてやらうとのことであつた。

そのために團平の苦心は大したものであつた。その後團平は十人が十人水も溜らず斬らねばならぬのだといつて工風を積んでゐるが、十人を斬るに皆三味線は盡く、伊勢音頭のチンチンテンレントツツテン、といふあの三味線の手を基調として作らねばならぬが、三味線の手は異つても、この伊勢音頭の



間拍子だけは踏襲されて、十人斬が出来たのである。ところで一箇所酔ひどれの嫖客が水を求めて來かゝつて殺されるところが、さすがの團平どうにも工風がつかつなかつた。團平はこの曲節を未定稿のままにして旅へ出た。その旅のうち出雲の松江で一泊の一夜、ふと旅の行燈に書いてある落書を見ながら團平何思つたか、「出來た」と飛上り手を拍うた。行燈の落書は、

お前まちく蚊帳のそと、蚊にくはれ、七つの鐘の鳴るまでも、コチャかまやせぬ。

の拙き筆の跡であつた。團平はこの「お前まちく」の三味線の手をこの十人斬に用ひたのだ。この手のウ、を拵へて十人斬にあてはめた。今日誰でも弾いてゐる油屋の十人斬は、この手が具通されてゐるのである。